

ばちんこ依存問題相談機関 リカバリーサポート・ネットワーク代表

# 西村直之

Naoyuki  
Nishimura

## 依存症を治せるという幻想を棄て “生き方”の改善をサポート

全日遊連の支援によって設立されたばちんこ依存問題相談機関「リカバリーサポート・ネットワーク」の代表、西村直之氏は、厚生労働省の研究員として薬物依存回復支援ネットワーク構築に携わった経験をもつ精神科医。

いよいよ4月19日より相談窓口となるホットラインが開設される。西村氏が勤務する沖縄県西原町のクリニックの近くにあるリカバリーサポート・ネットワーク事務局で話をうかがった。

取材＝田中 剛（本誌編集長）  
text & photo ＝ Tsuyoshi Tanaka



## 欧米でも ギャンブル依存問題は 本格的な研究が 始まったばかり

——リカバリ・サポート・ネット  
ワーク(以下RSN)設立の背景に  
は、パチンコを中心とした、いわゆ  
る「ギャンブル依存」の問題の深刻  
化があると思います。日本には、  
このような依存症者は300万人  
前後いると推計されているそうで  
すが、この点についてはどのように  
お考えでしょうか？

西村先生(以下、敬称略) 近年、「ギ  
ャンブル依存症」という言葉が簡単  
に使われていますが、実は、ギャン  
ブル依存症という医学的な定義は  
ないし、実態もほとんどわかってい  
ないのです。「WHOはギャンブル依  
存症を病気と認めているのに、日  
本では認められていない」という意  
見もあります。日本だけでなく、  
世界的にも、「ギャンブル・アデ  
クション」という明確な定義、医  
学用語は存在しないのです。IC  
D(※)に「病的賭博」というカテゴ  
リーはありますが、これは依存症  
候群というカテゴリーには入ってお  
らず、国際的にはどう位置づける  
べきか統一見解ができていません。

いわゆる「ギャンブル依存症」と訳  
すのは早計であり、医療の現場に  
おいてもコンセンサスは得られてい  
ないのです。しかも、「病的賭博」の  
実態もまだわかっていないし、治療  
法もないのです。

※注 ICD(疾病及び関連保  
健問題の国際統計分類)・異な  
る国や地域から、異なる時点で  
集計された死亡や疾病のデータ  
の体系的な記録、分析、解釈及  
び比較を行うため、世界保健機  
関憲章に基づき、世界保健機関  
(WHO)が作成した分類

——欧米ではギャンブル依存の問  
題研究が進んでいるといわれてい  
ますが？

西村 アメリカではカジノを「プロ  
ブレム・ギャンブル」として、カ  
ジノ開設の事前影響評価の中で、  
周辺問題への対処のひとつとして、  
ここ10年、依存が研究されていま  
す。イギリスでは、宝くじを作る  
ために、そのリスク評価としてギヤ  
ンブルの普及調査を1999  
年から行っており、その中で依存の  
問題も調査しています。研究のレ  
ベルでは、日本より少なくとも10  
年以上は先行しています。しかし、  
本格的な研究は、最近になってやっ

と始められたといっています。

——日本では、公的機関によるギ  
ャンブル依存問題は研究されてい  
ないのでしょうか？

西村 ありません。日本において  
はギャンブルの定義がないため  
です。日本では競馬などの公営競技  
やパチンコは、ギャンブルではないと  
されています。俗語として、「ギヤ  
ンブル依存症」という言葉だけが独り  
歩きしてきたことも、この問題が  
放置されてきた理由のひとつでし  
ょう。医学用語は曖昧な定義で言  
葉を使うことはできませんから、  
そういう病名はつけられません。  
存在しないものは調査できません。  
ちなみに、欧米においては、「ギヤ  
ンブル」が存在し、その定義には、宝  
くじや競馬、ある意味では証券市  
場さえ含まれます。日本において  
は、医学的には「遊技関連問題」と  
いう名前にすればよいと思ってい  
ます。その中に、いくつかの依存の  
レベルを定義すればいいのです。お  
金を賭けないゲームもここに含め  
ればいいでしょう。

## “依存というライフスタイル” という問題と捉えるべき

——パチンコがギャンブルかという

議論はともかく、例えば、「パチン  
コ依存症」を「パチンコをやめたい  
のにやめられない。のめり込みす  
ぎて、仕事などの社会生活に支障  
をきたしてしまふ。ひいてはそれ  
がもとで多くの借金を作ってしま  
う……」と定義することはできま  
せんか？

西村 それは、「依存症候群」の定  
義に非常に近いのです。つまり、依  
存症の対象が、パチンコであるとい  
うことで

す。依存症  
とは、依存  
の表現形  
に、対象物  
独特のパタ  
ーンが顕著  
に顕れた  
症状です。  
アルコール  
であればアルコール依存に顕著な  
パターンが出ます。パチンコであ  
れば、パチンコ依存に顕著なパター  
ンが出るということなのです。お酒  
を飲む人は大勢いますが、皆がア  
ルコール依存症になるわけではあ  
りません。常習性があるやめられ  
なくなるといわれている覚醒剤  
でさえ、依存症として表面化する  
のは、100万人以上いるとされ  
ている使用者の10%〜20%で、80%





以上の人は自然とやめているのです。こういった対象物が原因だと考えているのは、問題は解決しないと  
思っています。

——お酒じたいに依存性がある、ギャンブルじたいに依存性があるから依存症になる、ということではないのですか？

西村 ある調査によれば、アルコール依存症の人たちの20%〜30%には、いわゆる「ギャンブル依存症」が認められたとあります。これは、ギャンブル依存の症状と、アルコール依存の症状という別々の疾患が同時に起こっているのかということ、そうではありません。これは、いわば「依存」というひとつのライフスタイルであって、何かに依存して生きるという「生き方の病」と捉えるべきなのです。ですから、基本的な「依存」というライフスタイルが変わらない限り、何かしらの依存しつづけるのです。

——それがいまの医学会で主流の考え方なのでしょうか？

西村 私は約10年前にこういった考えに至りましたが、日本での依存症問題の理解はまだまだ低く、専門家と称する人でさえ正しい認識をしている人は少ないといえます。かつて病院は薬物依存の治療として何をしてきたかというと、例えばアルコール依存症者を閉じ込めて、身体の中からお酒を抜くということをしていました。しかし、そうして治療された人の回復率は恐ろしく低いのです。もしも、依存

性の問題だったら、一定期間その対象から切り離せば治るはずで  
す。しかし実際には、アルコール依存症者を強制的にある期間入院させても、何のプログラムもなしに退院させたら、9割の人はまたアルコールに手をだします。刑務所に何年間も服役し、その間、断薬(覚醒剤からの隔離)されていても、約半数は出所後1年以内にまた覚醒剤を使用しているという統計もあります。つまり、病院にせよ刑務所にせよ、何年間閉じ込めても、それだけでは依存症は解決しない、ということを目の当たりにしてきたのです。

### 「依存症」が問題なのではなく、依存症によって引き起こされるのが問題なのです

——なぜ、近年、パチンコへのめり込みがクローズアップされたのでしょうか？

西村 依存の対象物の危険度の評価には2つの軸があります。ひとつは、のめり込むリスクが高いか低いのかという軸。それはどれだけ人間の脳に与える刺激が強いかということ。もうひとつは、その対象物にどれだけ多くの人がアクセスするかという軸です。パチンコ依存が社会的な問題になった理由というのは、射幸性の高い機械がどんどん登場したということ、日本ではパチンコが非常に身近でアクセスする人の多いゲームだったからで

す。いつでもどこでも買えるアルコールへの依存とよく似ています。アルコールは、アクセスしやすい分、依存症にまで進行する人が多いという意味で、覚醒剤よりもずっと危険だといえます。パチンコも同じで、アクセスしやすく、遊技人口が多いため、多くの人が依存症に陥る危険にさらされていることになりました。これは、絶対数が多いということであり、危険度が高いという意味ではありません。

——依存症が他の病気と異なる点をご説明ください。

西村 病気であれば本人だけの問題ですが、「依存症」は、「依存」というライフスタイルがベースにあるので、対象物へのめり込みが進行していくあいだに、周囲のたくさんの人々を巻き込むのです。次々と問題を起こし、それが深刻化していきます。子どもの育児放棄などの虐待を例にすれば、「依存症」だから虐待をしてしまうのではなく、「依存」という生き方によって、「子どもの安全を守る」という親としての通常のライフスタイルからズレていってしまうのです。その程度が進行すると、車内への子どもが放置や多重債務などの問題が起これてしまう。病気の視点に偏っても、金銭問題にとらわれすぎても、生じている問題の全体像は見えにくくなります。生き方の歪みに目を向ける必要があります。ただ、精神医療がライフスタイルのサポートや改善にまで踏み込んで窓口を開きだしたのは、つい最近のこと

INTERVIEW  
Naoyuki Nishimura





で、まだ有効なノウハウがないので、

——改めて西村さんのお名刺を見ると、リカバリーサポート・ネットワークの冠には、「ばちんこ依存問題相談機関」とあります。「依存症」ではなく、「依存問題」と表記した意味をご説明ください。

西村 ここには重要な意味があります。「依存症」ではなく、「依存問題」としたのは、実は、パチンコにのめり込んでいること、つまり「依存」そのものは、困ったこととは言い切れないからです。例えば、医学的には「依存状態」で、毎日パチンコに行っている、勝っていれば周囲も本人もそれを問題とは認識しないでしょう。依存によって生じる借金などが問題となるのです。R

SNは、そういった「依存問題」の相談機関です。また、日本に存在しない「ギャンブル」の依存を扱おうとすると問題が曖昧なままになるので、「ばちんこ」として実態の把握に努めます。平仮名で「ばちんこ」としたのは、法律で定義されているのが、平仮名表記だからです。パチンコがギャンブルかどうか、のめり込みの状態が依存症かどうかということは、いったん棚に上げて、過度ののめり込みが原因でパチンコホールの周辺に起こっている問題の実態を、まず業界内で把握することが必要です。それをデータベリ

——非常に画期的なネットワークといえそうですね。

西村 日本では、国のどの機関も、どの公営競技団体も、この問題をとり上げようとしませんでした。しかしパチンコ業界は、「他がやらないから自分たちもやらなくてよい」とは考えなかつたのです。競輪にも競馬にものめり込みの問題はあるはずですが、少なくとも全日遊連を中心としたパチンコ業界は、パチンコへののめり込みによって現実に起こっている問題に真向から取り組もうと考えています。

### 依存問題は本人だけでなく 周辺の人々へのサポートも必要

——「依存問題」の相談機関ですから、巻き込まれてしまった周辺の人の相談機関でもあるのですかね？

西村 例えば、多重債務の問題は、周囲の人たちが借金の尻拭いをするから借金が増えるという悪循環に陥るのです。R SNでは、本人の健康問題、借金の返済方法について、どのような問題を抱えているかを聞いたうえで、精神保健福祉センターや自助グループ、専門機関を紹介します。私がいままで関わ

ってきた、薬物依存症者の家族のセミナーはパチンコ依存の家族の方にも参考になると思います。薬物依存の問題のほとんどは、多重債務の問題となつて表れているからです。そういう家族や本人のグルー

プや法律問題の専門家がどこでどんな活動をしているかを把握していますので、よい橋渡しをできると思います。

——依存症者の家族や周囲の人間に知っておいていただきたいことはありますか？

西村 周囲が本人の自立を妨げることが、一番いけない。往々にして、歪んだ形の愛情が、「依存という生き方」を支えてしまい、回復を妨げるのです。依存の問題解決は、家族のサポートが欠かせませんが、そこには「タフラブ(Tough Love)

といわれる愛情をもった突き放し、手放すという形のサポートが必要なのです。人は「情」の生き物です。鬼にはなれませんが、しかし「情」が人を殺すこともあるのです。ですから依存の問題は、本人もつらいけれど、周囲の人もつらいのです。そういった周囲の人々のつらさへのサポートも必要なのです。私は、迷子の共倒れを防ぎたいと表現しています。つまり、依存症の本人もどうしていいかわからない、周囲の人もどうしていいかわからない。わからない者同士では問題は解決できず、最終的には共倒れしてしまふのです。ですから、R SNにアクセスしてほしい。ここにアクセスしてくれた人すべてを解決に導くことはできないかもしれませんが、問題の内容に応じて援助をしてくれる専門機関・団体を教えるといった、道筋を示すことはできます。それだけでも、かなりの人を救うことができるはずですよ。



にしむら なおゆき

精神科医、リカバリーサポート・ネットワーク代表  
1990年、琉球大学医学部卒。95年、琉球大学医学部大学院修了。医学博士。国立肥前療養所アルコール・薬物依存治療病棟医長を経て、99年より医療法人卯の会あらかきクリニック院長。98年～02年には厚生労働省薬物依存班研究の研究員を務める。05年、リカバリーサポート・ネットワーク設立